

教科・領域等 [特別支援・進学指導]

1 (7) 学校間連携

👉 こんな実践

特別支援学級には在籍していないけれど、支援が必要な子供はどのクラスにもいるのではないのでしょうか。中学校進学にあたり、小中合同で連携支援会議を行った実践です。

実践学校 L小学校 実践時期 小学校卒業前3月

- A子さんは低学年の頃から多動傾向がありました。特に、苦手な算数では集中して授業を受けることが難しい一面がありました。教育相談を行ったり小児科を受診したりしていましたが、特別支援学級入級判定には至らず、通常学級で6年間学びました。
- A子さんの特性として、「暗黙の了解」がわからず、いわゆる「空気が読めない」ことがありました。小学校6年生になり、女子の複雑な会話についていけない場面が増え、友達に対して遠慮がちに関わるようになりました。その結果、学校生活へのストレスが増し、頭痛を訴えることが多くなりました。
- A子さんの中学校進学前の3月に、小学校の担任主催で連携支援会議を行いました。会議には、中学校の受け入れ担当職員と特別支援コーディネーター、小学校担任、保護者、市の教育相談巡回指導員の方々が参加しました。A子さんの小学校や家庭での様子を伝えた後、中学進学後に予想されるつまずきへの支援を考え合いました。人間関係の悩みを部活動の女性顧問や学年の副担任が気に掛けることや、養護教諭や司書教諭が声を多く掛けて必要な時に相談に乗れる関係を作ること等を確認しました。

**ここがポイント！**

教育相談巡回指導員やスクールカウンセラーは、小中で担当者が同じ場合が多いので、支援会議に参加してもらい、長い期間の支援を考えていきましょう。

👉 まとめ

通常学級在籍児童でも、特別な支援が必要な児童に対しては、担任が児童の困り感を多角的につかみ、中学校に引き継ぐことが大切です。小学校と中学校が連携して支援会議を行うことは、安心した中学校生活のスタートにつながります。